

# シフクノオトに包まれて

Mr. Children ツアー2004 シフクノオト 6/13 in横浜アリーナ・セットリスト



ひとことで言えばメッセージ性の強いコンサートだったと思う。ステージ上の4枚のスクリーンに現れる1台のバスがコンセプト・ストーリーを引っ張っていく。男の子を乗せてバスは走り始める。それが終わりなき旅の始まりだというように、オープニング曲は「**終わりなき旅**」だ。息を切らしてさ 駆け抜けた道を振り返りはしないのさ と歌うその歌はミスチルの魅力である「せつないまでの前向きさ」をふんだんに含んでいる。小脳梗塞から復帰後の初めてのツアーとマスコミから騒がれ、病気のことが今でもかれらには付いて回る。そんな中「**終わりなき旅**」を2004年の今聴くと、過去の紆余曲折のかれらの歴史を知るファンとして、歌はまた重みを増したように聴こえる。この歌には今までどんなにお世話になったか。そこにはわたしの歴史も確かにある。

二曲目は「**光の射す方へ**」。1997年の一年半の休業からの復帰第一作が「**終わりなき旅**」、そして復帰第二作がこの曲だった。思えば心を病んだり、体を病んだりとほんとに落ち着かないバンドなんだな。しょっちゅう休業してるよね。月夜に歌う虫けら 羽を開いて光の射す方へ 会場の1万5000人が光の射す方を指差す。ひとつにならなくてもいい、だけど自然にひとつになれるときもある。

三曲目「**PADDLE**」。行こうぜ！！って、まるで若かりし頃のミスチルじゃん。

四曲目「**innocent world**」。いい歌だ、ほんとに。第一音が鳴っただけで会場が震える。こういう曲をいくつも持っていることはミスチルの強味だ。

## 【MC】

五曲目「**花言葉**」。MCからの流れでラブソングを。六曲目は「抱きしめたい」かと思いきや、意外に「**口笛**」。さあ手を繋いで僕らの今が途切れないように の部分を「歌いたい人は歌って」と会場に振る。ずいぶん優しくなったじゃん。たったひとりの「僕」と1万5000人の「君」の合唱。でもたったひとりの僕はみんなの胸にきちんと住んでる。それぞれの今を途切れさせないように。

桜井くんの生口笛にも感動。「**口笛**」ってこんなにいい歌だったんだ。

## MENU

1. 終わりなき旅
  2. 光の射す方へ
  3. PADDLE
  4. innocent world
- <MC>
5. 花言葉
  6. 口笛

で、次が「抱きしめたい」ね。ラブソングなんて嫌いなのにこの歌はいいんだなあ～（陶醉）

続いて「Pink～奇妙な夢」「血の管」とアルバムの流れのままの二曲。思いを飲み込んだ昨日より ぶちまけた今日のほうがより 多少は黒ずんだりしてるけど愛しさは増えるよ 黄ばんだり黒ずんだりしたほうが愛しさは募る。こんなふうに歌ってくれるバンドをわたしはかれら以外知らない。

そしてここからメッセージ性が一気に強まる。十曲目「掌」。ひとつにならなくていいというもとのテーマを間奏でより強調。「ひとりづつ」「それぞれふたつ」をいろいろなシチュエーションで繰り返す。僕の存在が君の存在を損なわない。君の存在が僕の存在を損なわない。価値観や理念や宗教もひとつにならなくていいよ。

「ニシエヒガシエ」1998年、かれらが休業中に発表した作品。最近のコンサートでは定番曲。ひどく暗いがミスチルのロック魂炸裂曲である。でも今日は一味違う。スクリーンには世界の状況が映し出され、ステージでは桜井くんがそのテレビを見ている。また君の中の常識が揺らいでる 知らなきゃよかったと思うことばかり 1998年当時にはかれの個人的悩みとして聴いたこの歌が違う顔をみせる。視点を変えると同じ歌が違って聴こえるんだ。それは桜井くん自身が変化したことを物語っているように見える。

スクリーンには「Close your eyes」の文字が。そして どのくらい目をつぶっていたらう？ と、十二曲目「Image」へと導かれていく。これは1999年の曲。生きて行くことの意味は争い合うことにすり変わっていくと歌うこの歌は、今聴くと、終わりはいつくるのかと思う、あの戦争を思い出したりする。この歌もまた変化していたと思う。目を開けて、世の中を自分をみつめていかなければ。「Open your eyes」この後に「タガタメ」が続くかと思った。でもそれではあまりに重すぎたのかもしれない。

## 【O v e r t u r e】

アルバム「It's a Wonderful World」の前奏曲 Overture からアルバムと同じ流れで十三曲目「蘇生」へ。何度でも何度でも僕は生まれ変わっていくと歌ったその時にかれは病気で倒れたのだ。感慨深い・・・けどさ、歌詞忘れちゃ嫌だあ。よく歌詞忘れたり間違えたりするんだよね。それもライブならではと我慢我慢。

十四曲目「Youthful Days」サービス曲かしらね。「優しい歌」のほうが合う気がするけど。十五曲目「くるみ」。好きな歌だけどあまり今回は目立たなかったかも。



そして「天頂バス」。スクリーンの男の子はシフク行きのチケットを手にする。そしてまたバスに乗り込むために走っていく。天国行きのバスで行こうよ 揺れるぞ地に足を着ける シフク行きは天国行きらしい。そしてバスは揺れる。揺れるバスは生きて行く道だ。トンネルを抜けると次のトンネルの入り口で 果てしない闇も永遠の光もないって近頃は思う どん底に落ちたら這い上がる力をわたしたちはきっと自然に持っている。光はまた闇があるからこそ際立つ。シフク行きのバスは途切れることなく何台も何台もずっと走っている。それに乗る少年もきっと何人も何人もいるのだろう。十七曲目「HERO」。たとえば誰かひとりの命と引き換えに世界を救えるとして 僕は誰かが名乗り出るのを待っているだけの男だ と歌うAメロが ヒーローになりたい ただひとり君にとつての と歌うサビより好きだったが、今日のコンサートではこの曲もまた違う意味を持つように感じる。例えば戦争だ。戦うことによって公のヒーローになる、または戦争批判などを公の場で訴える。個人よりも国家という大きな使命を持つ者となる、そんなヒーローではなく「僕は君だけのヒーローになりたい」のだ。もしかしたらこの歌はヒーロー否定の歌なのかもしれない。小っちゃな男の小っちゃな愛。でもその愛は連鎖してひとつの大きなものに昇華していくのかもしれない、桜井くんの熱唱がそんな思いをわたしに抱かせる。



### 【アンコール】

アンコール1曲目は「Mirror」。当時のベストセラー「ソフィーの世界」に触発されて作った歌だと思う。あなたが誰でなんのために生きてるか その謎が早く解けるように 鏡となり傍に立ち あなたを映し続けよう と歌う。考えようによっては、こんな鬱陶しい男もいないよね。合わない人はとことん合わないだろうな。

そしてここで「タガタメ」を情感込めて。今宵の桜井くんの歌唱は絶好調じゃないかな。

### 【メンバー紹介】

ラストは最新曲「Sign」で締め括られる。

「さんきゅう。どうもありがとう」かれらの姿がステージから消える・・・。  
開始から2時間20分が経っていた。

New Albumシフクノオトをツアータイトルに冠したコンサートだったが、その中の三曲「言わせてみてえもんだ」「空風の帰り道」「Any」は演奏されなかった。ミスチルの10年間の総括ソングとも言える「Any」はなぜセットメニューから漏れたのだろうか 間違いじゃない きっと答えはひとつじゃない と、生きて行く過程に起こるマイナスと思える事柄も肯定的に捕らえた歌だ。「くるみ」でもかれらは「ボタンの掛け違い」

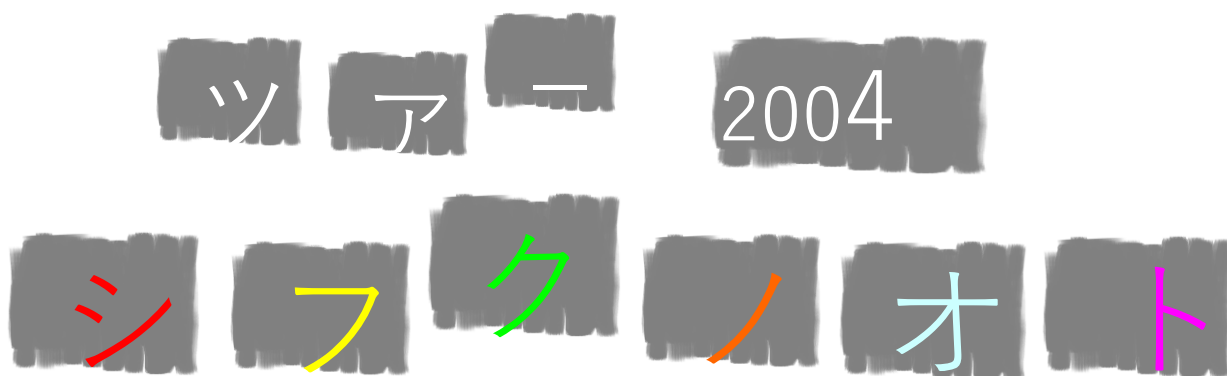
という一見間違ったことから生まれる希望を歌っていた。「くるみ」が「A n y」の代わりも果たしたのかな？「A n y」っていう歌は DoCoMo の CMソングとしてサビだけ聴きすぎたせいか、Aメロとサビのアンバランスな感じから未だに抜け出せない。個人的にはセットメニューから漏れてもあまり残念じゃないかな(^)

「言わせてみてえもんだ」は生で聴いてみたかった。愛想を尽かしてくれても一向に構わないでもどうしようもなく必要って言わせてみてえもんだ の歌詞には全くもって共感する。ファンに対して言っているという聴き方もアリなんじゃないかな。

とにかく、とてもいいコンサートだった。「口笛」「掌」「ニシエヒガシエ」のアレンジは大成功だった。こんなふうに明確なコンセプトを打ち出したツアーはアルバム深海のツアー「Regress or progress」以来のことだったと思う。

かれらは今始めて、「深海」から、脱出したのかもしれない。

**Out Of Deep Sea** その先にかれらを待っているものはなんなのだろう。



ミュージシャンというのは因果なものだと思う。CDを出す。売れる。お金が入ってくる。自分を見失う。こんな流れのミュージシャンばかりでないことはよくわかっているが、実生活や考えていることがそのまま歌になるミスチルの場合には、この辺りも難しい問題になってくるのだと思う。かれらは自分を見失ったときにその苦しさを素直に歌にしてきた。今その時期を過ぎ、これからは、人間の心の奥に潜む根源的な苦悩、男女間の恋愛だけではない愛そのもの、そういうものを探し歌っていくように思う。桜井くんは常日頃「音楽で得た収入は音楽に還元したい」と言っている。人間の苦悩や葛藤を歌いながら「ミスチルって好きなことしてて、いい生活してるじゃん」とファンに思われてしまったら歌はやはりリアルには響かない。音楽で収入を得るものにとっては、たとえ身を削って作った歌であっても、その矛盾は付いて回るだろう。売れるということのマイナス面のひとつなのかもしれない。かれらにはそんな矛盾も、認識し把握しこれからも忘れずに背負い続けて行ってほしい。こういう気持ちを整理できなかった者として、わたしは尾崎豊を思い出す。かれは売れたことと音楽を鳴らすということの折り合いをうまく着けられなかったのではないかな。社会批判、大人批判の歌が多いように見受けられるかれは、自分自身が大人になったとき、自身の奏でる音楽の方向性を見失ってしまったのではないかな。尾崎豊をよく聴くわけではないが、あの時期を乗り越えていたら、以後数々の人の心に残る曲を作っていたかもしれない。

ミスチルには尾崎豊になってほしくない。伝説はいらないのだ。